

# 国際花と緑の博覧会の理念とその継承

The Philosophy of the Expo'90 and Its Inheritance

三谷 彰一

Shoichi Mitani

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会 企画事業部長兼総務審議役  
Expo'90 Foundation, Director, Planning Project Promotion Department, Policy Coordination

## 1.はじめに

1990年(平成2年)、日本で4回目の国際博覧会で東洋初の国際園芸博覧会(A1)<sup>\*1</sup>であった国際花と緑の博覧会(以下「花の万博」)が大阪・鶴見緑地で開催された。この博覧会は「自然と人間との共生」をテーマに、63か国55国際機関、650の企業や団体の参加を得、2,319万人余の入場者を迎えて、成功裡に終了した。その成功の鍵は、花と緑を単なる物ではなく、生命、文化の象徴とした次のような「基本理念」があったからと推察する。「20世紀の産業文明の発展は、今あらためて、あの花と緑に象徴された、自然の生命の偉大さを再認識させている。緑こそは、無機物を有機物に変え、生命を根源から生む力である。花はこの隠れた力の優美な表現であり、生命そのものの賛歌である。これを愛し敬うことは、自然と生命を共有する人間の心の本能であり、人間相互の尊重、世界平和への願望のもっとも素朴な基礎だと言える(一部)」。



国際花と緑の博覧会会場

## 2.時代背景

地球環境問題は、1970年代の地域的な産業公害から始まり、1990年前後にはオゾン層の破壊や酸性雨問題、地球温暖化などが地球規模のグローバルな課題となり、大量生産、大量消費の結果として出現した。これに対応する国際的な動きとして、1972年に「国連環境人権会議」(ストックホルム)が開催されたことに端を発し、1987年には「環境と開発に関する世界委員会」において報告書「地球の未来を守るために Our Common Future」が提出された。これは、「環境と開発は相反するものでなく、不可分の関係にあり、開発は環境や資源という土台の上に成り立つものであること、このため持続的な発展には環境の保全が必要不可欠であるとする『持続可能な開

発』の概念を提唱したものである。なお、花の万博後の1992年には、リオデジャネイロで「地球環境サミット(環境と開発に関する国際連合会議)」が開催され、環境分野での国際的な取組に関する行動計画である「アジェンダ21」が採択され、国際協調の動きが活発化された。

国内においては、1980年代は博覧会ブームと言われ、大小50以上もの博覧会が開催される中、1986年末からは空前の好景気(バブル景気)もあって、人々は娯楽・消費を謳歌した。

このような時代背景下において花の万博は、地球環境問題に対する憂いと、博覧会ブームにおけるパビリオンと商業施設という金太郎飴的会場に対して食傷気味であった状態に対応し「物の豊かさから心の豊かさ」「母なる地球における命の連鎖と共生のあり方」ということを提示したことが、多くの人々の共感を得たと思われる。

## 3.国際博覧会の流れと花の万博の役割

国際博覧会は、1862年のロンドン万博を皮切りに、産業革命という歴史を背景にしたうねりゆく世界の黙示録であった。日本においては、1970年の日本万博の「人類の進歩と調和」というテーマが示すとおり、当時の日本の右肩上がりの経済を象徴するものとして、動く歩道やテレビ電話など、今では実用化された夢の機器や月の石が話題となった。その後の沖縄海洋博は海の開発と利用を表す「輝かしい海」をテーマにし、つくば科学技術博は「人間・居住・環境」として、ピアノ演奏をするロボットやバイオテクノロジーによる巨大トマトが耳目を集めた。花の万博は、これら産業技術を展示してきた国際博覧会と違い、それまで脇役であった「花と緑」を主役に、科学技術は裏に隠すものとして、植物の役割、重要性を見つめなおし、自然と共生する近未来の都市像を体験するものであった。

国際博覧会は、未来社会の実験の場であると言われるが、花の万博の会場を見たBIE(博覧会国際事務局)幹部は「これが未来の国際博覧会の姿だ」と驚嘆と感激の言葉を残している。また、花の万博の2年後の1992年、日本国政府はBIEに対し、今後の国際博覧会の在り方を記した提言書「国際博覧会の効果分析調査の最終報告書」を提出し、BIEは1996年の総会で可決、「国際博覧会は世界の課題の展示、解決の場」とこれまでの開催趣旨を大きく変更した。花の万博は150年余続いた国際博覧会の潮流に一石を投げ、ターニングポイントとなったと言える。

#### 4. 自然と人間との共生

前述のように、1990年前後、国内ではバブル景気に沸く中、地価の高騰、交通渋滞、ヒートアイランド等の都市問題が、地球規模では、酸性雨、温暖化、熱帯雨林の乱伐、オゾン層の破壊、慢性的な飢餓の偏在などの諸問題が台頭していた。これらに呼応するかのように、「共生」という日本的、東洋的な考えを欧州の伝統的な園芸博覧会に融合した花の万博は、19世紀半ばより国威発揚として時代の精華を展示してきた従来の国際博覧会とも趣を異とするもので、当時掲げた「自然と人間との共生」は、現在でも色あせない重要な理念である。

「共生」という言葉は、元は、寄生・片利共生・相利共生という生物学用語であるが、総合プロデューサー<sup>\*2</sup>であり作家の小松左京氏の提案によりテーマとなり、花の万博は、地球生命の賛歌として「いのちの祭典」とも称すこととなった。

また、花の万博開催前年の1989年にベルリンの壁の崩壊と共に、新しい社会秩序確立の動きが加速された。それまでの戦争や分断といった悲惨な結果しかもたらさない世界の構築ではなく、花と緑、そして共生を世界の共通言語として、融和と調和のある共生社会の構築を提唱したことは大きな成果といえよう。

花の万博会場内は、テーマの具現として「太陽の丘〈鶴見新山〉」「いのちの海〈大池〉」「みどりのゲート〈中央ゲート〉」「香りが辻〈ロータリー広場〉」「すずやか辻〈施設広場〉」等のネーミングが付けられた他、「シンクロニシティ(同時共時性)」等のソフト催事も展開された。また、パビリオン敷地の緑被率を、博覧会では初めて50%としたほか、セネガルは花や緑ではない「砂漠」が展示された。

ちなみに、「共生」は、その後、省庁や自治体の施策、政治マニフェスト、大学の新学部名や不動産広告等の社会用語としても使われ、国や民族はもちろん、言語、ジェンダー、世代などの異なった文化やアイデンティティをつなぐ言葉として見受けられる。「共生」のインターネット検索は2009年に2,590万件がヒット(筆者調べ)しており、2023年春には5,150万件にのぼった

仏教では「今あるすべての命の連綿とした繋がりを大切に」という「共生/ともいき」という考えがあり、これは日本人の死生観、生命観の背景のひとつともなっている。つまり共生は、狭義な生物学的解釈をすれば、生物間の関係であるが、広義では、日本人の心の奥にある、人間も自然の一部であるという自然観や「いただきます」「もったいない」という自然の恵みへの感謝と慈しみの思いである。これまで進められてきた地球環境問題は、「持続可能」や「地球にやさしい」という人間本位の「シャロー(浅い)エコロジー」であるが、花の万博が掲げた日本人の自然観=共生は、単なる共存ではなく、生命体同士の相互関係や相互作用である。自然と人間、自然と都市、自然と産業などが対立しない思想は、四季折々の美しくも厳しい森羅万象の自然を、畏怖、畏敬しながら生きる人々の営みにより形成されてきた。

蛇足であるが、「自然と人間との共生」を決定する際には「『自然』が前か『人間』が前か」「『との』が良いか『と』が良いか」等の深淵な議論があったと聞いている。

#### 5. 共生思想の継承と発展

花の万博後、2005年に愛知県にて「愛・地球博」が開催されたが、そのテーマが「自然の叡智」であった。これは、花の万博総合プロデューサーであった泉真也氏が、愛・地球博においてもプロデューサーを務められ、「共生」同様のテーマとして模索、策定されたものである。

また、理念を継承し、発展させるものとして特筆すべきは、当国際花と緑の博覧会記念協会が1993年に創設した「コスモス国際賞」である。この賞は、当時、皇太子殿下として花の万博の名誉総裁であられた天皇陛下が、引き続き関わりをもっていた国際顕彰事業で、毎年、全世界から1名ないし1チームを選び、賞金4千万円を贈っている。生物や生態系、社会の網の目のように絡まった複雑な統合系の全体にアプローチすることを視点とし、包括的、統合的な方法論によって、地球における生命現象の解明に貢献した研究業績を対象としている。

前述のシャローエコロジーに対する「ディーブ(深い)エコロジー」(ノルウェーの哲学者アルネ・ネスが提唱)は、「自然に支えられて生きる人間という世界観を人類が再認識することなしに、環境問題は何ら解決しない」という概念で、その特徴のいくつか『(1)生命体や人間を個々の別々の存在として捉えるのではなく、相互関連的、全体論(ホーリズム)として捉える。(2)多様性と共生として、生存の潜在的可能性と新たな生命出現の機会、生命様式の豊かさ等を増大させる。(3)生命体や自然の中の高い複雑性を評価し、社会システムの中に実現させる。』<sup>1</sup>は、コスモス国際賞と近似性を持つが、賞が目指す共生は、さらに進化し、国や民族などの格差、差別をも乗り越え、全てを包んだものである。

依然、世界各地にて戦争や紛争は続いており、人類の地球に対するインパクトを新たな地質層「人新世」とすることも進められた。このような時にあらためて、「花は緑の精、緑は地球の言葉」<sup>\*3</sup>の大切さを感じる。現在、横浜において37年ぶりの大国際園芸博覧会「GREEN×EXPO 2027」の開催準備が進められているが、この博覧会が時代を映す舞台となり、かつエポックメイキングとして、その意義が世界に広がり、1990年の波紋と共に心の豊かさの時代づくりに寄与することを願っている。

#### 【注釈】

※1 A1は、開催期間3週間~6か月の国際園芸博覧会

※2 花の万博総合プロデューサーは、小松左京氏、泉真也氏、磯崎新氏の3氏

※3 大塩洋一郎 花の万博協会事務総長・花博記念協会初代理事長の造語。

#### 【参照参考文献】

・(財)国際花と緑の博覧会協会(1991)EXPO'90国際花と緑の博覧会公式記録

・東京大学出版会(2009)『環境倫理学』

・朝倉書店(1996)『環境倫理と環境教育45-65頁(森岡正博)』